抱樸館を支える会
会報 46号
2021年２月１日 発行:抱樸館を支える会

コロナ禍におけるホームレス支援の現場より

～長崎ホームレスを支援する会を取材してきました～

長崎市でホームレス支援を行っている「長崎ホームレスを支援する会」を訪問し、会長の井手義美さんにお話を聞いてきました。

――ホームレス支援を行うようになったきっかけを教えて下さい。

「長崎市では個人レベルでホームレス支援を行っている方はいましたが、組織的な支援ができていませんでした。２００８年のリーマンショックをきっかけに個人レベルでは対応できないということで、『今、長崎で必要とされるホームレス支援とは何か？』という市民集会を開きました」

井手会長

「約１００名が集まったこの集会の基調講演の講師は、ホームレス支援に長年携わっているＮＰＯ法人抱樸（当時：北九州ホームレス支援機構）の森松専務理事をお招きしました。参加者は講演や呼びかけ人の真摯な訴えを聞いて、長崎におけるホームレス支援活動の必要性を痛感し、この集会をきっかけに前身の『長崎・ホームレス支援活動を準備する会』が発足しました。発足当時は約４０名で活動していましたが、ホームレスの減少と共に今では１０名足らずとなっています。しかし、活動は途絶えることなく、助けを必要とされる方々への支援を続け、今年で１０周年を迎えることができています」

――どれくらいの頻度で活動されていますか。

「主な活動は、毎週木曜日の夜の弁当配り（夜回り）です。今年の初めまでは、水曜日の早朝も街をまわったりしていましたが、現在は活動メンバーが少ないため木曜日のみの活動です」

――具体的な活動内容を教えて下さい。

「木曜日の夜にボランティアの皆さんが会場に集まり、それぞれ１週間の活動報告や情報の共有を行います。その後、２１時３０分頃から弁当配りへ向かいます。毎週配っている弁当はカトリック飽の浦教会、中町教会、深堀教会などにご協力いただいています。今日は１６人へ弁当を配る予定ですが、そのうちホームレス状態の方は２人です。１人は長期のホームレスで、生活保護を受けてアパートで生活するよう促していますが『今のままの生活がいい』とのことで、それ以上は無理強いしないようにしています。その他の弁当を配る方は元ホームレスの方々で、ほとんどが独りで生活をされているので安否確認や困りごとの相談にのっています」

――これからについて

「今日は弁当と一緒に無料・低額診療制度の案内のチラシを配布しました。週に一度の活動ですが、このようにホームレスの方や生活困窮者の方々に対して弁当とともに助けになる情報をお届けしたり、皆さんのよき相談相手として、これからも細く長く関係を持ち続けたいです」

――ありがとうございました。

熊本で刑余者の方々を支え続けて

熊本リスタート、リボーン、リ・ワークについて取材してきました

社会福祉法人グリーンコープでは犯罪を犯して罪を償った後、帰るところが無い方を支援する施設があります。自立準備ホーム「リスタート」、障がい者グループホーム「リボーン」、就労継続支援Ｂ型「リ・ワーク」の３施設の総括責任者の丸野由起子さんに話をお聞きしました。

――リスタート、リボーン、リ・ワークについて教えて下さい。

「施設の名称には、人生を再スタート（リスタート）して、生まれ変わって（リボーン）、再び働ける（リ・ワーク）ようになるという意味を込めています」

丸野由起子さん

リスタートについて

「リスタートは、保護観察所からの委託により、罪を償った後、帰るところのない人たちを最大で６ヶ月間、支援する住居施設です。リスタートに入所した方は、まずは就職先を探します。就職については、協力雇用主（※）の企業へ就職をするか、または支援員と一緒にハローワークに行って仕事を見つけます。仕事を見つけた後は、入所中の６ヶ月間で退所後の生活資金として５０万円貯めることを目標に仕事をします」

（※）犯罪・非行の前歴のために、定職に就くことが容易でない刑余者をその事情を理解した上で雇用し、協力する民間の事業主

リボーンについて

「リスタートに入所する方の中には、知的障がいや精神疾患などを持っている方も少なくありません。そのような方々が再犯せず社会の中で生きていくために支援を行う障がい者のグループホームがリボーンです。入所の期限はありません。本人の希望によって退所して単身で生活を行うこともできますが、今いる方で退所して一人で生活をしたいと言う方はいません。入居者の中には長い方で３年以上いる方もいます。生活のことなどで注意されることもありますが、それも含めてここでの生活が居心地いいのでしょうね」

リ・ワークについて

「リ・ワークは、年齢や体力などの面で雇用契約を結んで働くことが困難な方が、軽作業などの就労訓練を行うことができる福祉サービスを提供する施設です。ここでは、果物に使用する緩衝材を二つに折る作業や、紅茶のティーバックのヘリ部分を折る作業などを行っています。朝は９時３０分頃から１６時３０分頃まで作業を行います」

――これまでの活動を振り返って印象的なことはありますか。

「支援している方が生まれて初めて書いた年賀状をもらったことがあります。そのときはとっても嬉しかったですね。その他、ある方が再犯をしてしまい、弁護士を通してどうしても会いたいと言われ、会いにいったときに『帰ってきてもいいですか』と聞かれた時ですね。私はその時つい『まず、ごめんなさいが先でしょう』と言ってしまいましたが、帰る場所がここだと思ってくれているのは嬉しく感じました」

――今後やりたいことなどを教えて下さい。

「後継者がいないことが今の悩みなので、後継者を育てていくことですね。支援を行う中で、対象者への言葉かけはとても難しいです。特に見た目は健常者に見えますが、障がいを持っている方が多くいます。その方たちに注意をするときも言葉ひとつ間違えるだけで『も

ういいや。ここを飛び出していこう。』と感じる方もいますので言葉のかけ方はとても大切です。しかし、一番大切なことは相手と信頼関係を築くことです。私はどの利用者に対しても強く叱ることが多くあります。でも、後になってですが、叱られたことさえも喜んでくれます。これは何年もかけて関係を築かないといけません。関係を築くためには、寄り添うだけでは駄目だと思っています。犯罪を理解し、個々の特性を理解し、障がいを理解することが大切だと思います」

ーーありがとうございました。

今回、リスタートの入居者でリ・ワークでも働いている、ＨさんとＳさんにお話を伺いました。

ーーここに来るまでの経過などを教えて下さい。

Ｈ氏「僕の出身は宮崎県ですが、熊本市に来る１年ぐらい前、ずっとホームレス状態でした。僕はお金もなく、知り合いもいなく、目的もない日々を過ごしていました。その時に、２回ほど自殺をしようとしたことがあり、本当に人生のどん底の時期がありました。そこから色々あって、ここでお世話になるようになりました」

Ｓ氏「熊本市に来る前には福岡で仕事をしていました。その職場では、仕事が上手くいかず、肉体的にも精神的にも追い込まれることがありました。そこから、逃げるように熊本へ来て、途中で失敗もしてしまい、そこからここでお世話になるようになりました」

ーーリ・ワークでの仕事はいかがですか。

Ｓ氏「一般就労を最終目標としています。リ・ワークでの仕事は単純作業ですが、今後の訓練と思って頑張っています」

Ｈ氏「職場の体験という形で、リ・ワークで仕事をさせてもらっています。果物の緩衝材や紅茶のティーバックの周りを折る仕事で、簡単な作業ですが、ミスをしてしまうこともあります。一般就労に就くための、また、ゆくゆくは自立をしていくための訓練と思って作業をしています」

ーーお二人にとってのこの場所はどのような存在ですか。

Ｈ氏「僕が思ってる中では、もう家族と同じです。僕は母と妹がいるのですが、それ以上の存在と感じることさえあります。自分が生きて、仕事に就けて、アパートに住めているのは丸野さんのおかげだと思っています。一歩ずつではありますが、確実に前へ進んでいると実感しています」

Ｓ氏「自分は地元にいるときは、家族と関係が全く持てていませんでした。両親は自分が小学生ぐらいの時に離婚して、ずっと父親と過ごしてきました。面倒は見てくれたのですが、父親との関係はうまくいかなかったです。母親の愛情も感じたことがなく、どちらかというと祖母に育ててもらった感じでした。そんな環境で育ったのですが、丸野さんと出会って、ここまで自分のことを理解してもらえた人はいないと思っています。実は、一度はここからも逃げ出したのですが、丸野さんが『またやり直したいなら面倒見るから戻っておいで』と言ってくれたときは、言葉もありませんでした。思い出したら涙がでてきます」

ーー今後の目標を教えて下さい。

Ｈ氏「これまでコンビニやガソリンスタンド、遊戯施設などで接客業をしていました。また、接客業に就きたいと思っています。いつか自分が働いて稼いだお金で、お世話になった職員さんに食事をご馳走したり、車を持てるようになったら、ドライブに連れて行ったりしたいですね」

Ｓ氏「自分は今までいっぱい失敗をしてきたので一歩ずつ確実に進んでいきたいです。リ・ワーク（就労継続支援Ｂ型）を出て、その次は就労継続支援Ａ型に進みたいです。そこで少しサポートをもらいながら人との関りを増やして、一般就労につなげていきたいと思っています。また、焦らずひとつずつ乗り越えて成長していきたいと思っています」

ーーありがとうございました。

寄り添いながら入居者、卒業生の支援を行なっています

抱樸館福岡の上野主任に話をお聞きました

抱樸館福岡が開所した２０１０年５月から入居者と卒業生の支援を行なっている主任の上野麻帆さんに話をお聞きました。

――生活困窮者支援に関わりたいと思うようになったきっかけを教えて下さい。

「高校生のとき『将来は介護の仕事に就きたい』と思って、福岡にある福祉関係の専門学校に入りました。主には介護福祉の勉強と社会福祉の勉強をしましたが、授業の一環でＮＨＫの『プロフェッショナル』という番組を観る機会があり、そこにＮＰＯ法人抱樸の理事長の奥田知志さんが出ていて、そこで初めて生活困窮者支援という分野があること、福祉の形には高齢者福祉、障がい福祉だけでなく、もっと広い意味としての社会福祉があることなどを知って、興味がでたことがきっかけでした」

上野麻帆さん

「それから、ボランティアで炊き出しなどの活動に参加したり、救護施設（※）で実習も経験しました。救護施設では、高齢者、障がい者というだけでなく、複雑な家庭の問題、経済的な問題、身体的な問題など色々な事情を合わせ持った方が多くいました。その方々の相談支援を目の当たりにし、おこがましいのですが、当時の私は『なにか人の役に立つ仕事をしたい、同じ人と人として寄り添いながら支援をしたい』という強い思いが生まれ、生活困窮者の支援に携る仕事を選びました」

※生活保護法に基づく保護施設のうち、身体や精神に障がいがあり、経済的な問題も含め、日常生活を営むことが困難な要保護者が生活扶助を受ける入所施設

――具体的な仕事を教えて下さい。

「色々とありますが、まずは、関係機関やご本人からの相談を受けるところから始まります。相談内容は様々ですが、具体的には、家賃を滞納し住まいが無くなりそう、いま住むところが無い、病院から退院するけど退院後に行くところが無いなどです。また、地域の住民の方から『あの橋の下に住んでいる方が心配だからどうにかできませんか』などの相談もあります。相談後、抱樸館への入居が決まったら、抱樸館福岡で過ごすにあたり、オリエンテーションを行います。門限があること、お酒が飲めないこと、生活支援の一環で金銭管理をすることなどをお伝えします。このような施設での生活は初めての方が多いので、不自由に感じられる方が多いと思います。必要なことだと後に感じてもらえるように、ご本人に寄り添い、支援をしています」

――入居後の最初の支援について教えて下さい。

「入居後は、その方の今までの生活歴について話をお聞きします。幼いころの家庭環境や楽しかったことや苦労したこと、小・中学校、高校、大学の学生時代の話、どんな仕事をしてきたのか、就職や退職したきっかけ、金銭的に余裕がなくなった時のこと、家庭を持っていたときのこと、離別したことなど、人生で起こった様々なことを詳しくお聞きます。それらのお話を含めて、今後のプランを入居者と一緒に立てていきます」

「支援の際、私たちが目に映ったものだけで判断してしまったら、本人の望むことや考えていることに寄り添いにくくなります。きちんと相手の話を聞いた上でどうしたら次のステップに進めるかを一緒に考えるようにしたいと思っています。そのためには、いま困っていることが何なのかということを、一緒に考えられるようにひとつずつ可視化します。そして、抱樸館にいる間に解決することが難しいことでも、どこまでやってみるかを一緒に考えます。ただし、人それぞれ目標は異なります。健康のこと、お金のこと、仕事のことなど様々ですね。健康に問題があれば、通院

して体調の回復を図ります。借金の問題がある方は、グリーンコープの生活再生事業に相談し、必要に応じて弁護士に繋いでもらうなどの対応を行います。仕事がしたい方は資格取得し、就職活動をします」

――そこから支援がスタートするんですね。

「最初に、健康診断を受けます。今まで体調不良を感じながらも、金銭的な理由から受診ができなかった方が多くいます。検診後、病名などが明らかになった方は、専門の医療機関を受診します。次に、抱樸館に入居する方は住所が無い方、前の住所のままの方が多いので住所設定を行います。住所が設定できたら身分証を作成します。身分証ができれば口座をつくることができます。その他、生活保護の申請や年金の受給権の確認などを行います。連絡先が無い方は携帯電話の契約を行い連絡先の作成を行います。それで目標に向けた準備が整い、支援がスタートします」

――入居される方には障がいを抱えた方が多いそうですね。

「これまで入居された方のうち約４割の方が何らかの障がいを抱えられています。これまでなんとか頑張って生活していたけど、周囲や本人はそのことに気づかずに過ごして、抱樸館に入居して初めて障がいがあることに気づいたという方がほとんどです。私たちも全て分かるわけではありませんが、生活歴、職歴などの話を聞く中で、色々な可能性を考えていきます。例えば、仕事を転々としていた、周りと馴染めず人間関係に苦労してきた、ひらがなや、小学校低学年で習う漢字が上手く書けないなどが気づくきっかけとなる場合があります」

「生きづらさや躓きの原因が何かということを一緒に考えることが大切だと思っています。私たちは本人の辛かった時期についての経験に共感し、寄り添い、その原因を考え病院の先生に相談するなどし、さらには他の機関に繋ぐこともあります。原因（障がい）が明確になり、これまでの生きづらさの原因が分かることで安心される方もいます。障がいがあるということが分かれば、就労支援などの活用できる制度の幅が広がりますし、そうして様々な社会資源に繋いでいくことで、私たち以外の人たちにも支援をしてもらいながら、抱樸館を卒業した後の地域での生活が安心して過ごせるようになります」

――支援をする上で大切にしていることを教えて下さい。

「支援をする中で厳しいことを言わなくてはならない場面もあります。でも、最終的に本人が『自分のためを思って接してくれている』と思ってもらえるように日々関わるようにしています。そのためには、自分の価値観を押し付けず、相手の気持ち、考え、価値観などを一旦受け入れて、そこから相手に向けて対話を積み重ねるようにしています。また、抱樸館を出てからも、何か困ったときは、抱樸館に相談しようかなと思ってもらえる関係づくりを意識しています」

――その他の支援を教えてください。

「入居者や卒業生同士の仲間づくりにも力を入れていて､色々なイベントを開催しています。でも、コロナの影響を受けて今はそのほとんどができていません。最近、入居者と一緒にしているのは、抱樸館内の定期的な除菌作業やグリーンコープの様々な事業所で使用している飛沫防止パネルの作成です。一緒に作業をすることで、挨拶をして、会話をして、連帯感を生み、仲間意識を高めることができると考えています。また、作業を終えた後、一緒に達成感を味わい、自己有用感も高めることができます。その活動から仲間ができて、お互いが緊急連絡先となり、何かあったときに動けるようにしているんです」

手作りの飛沫防止パネル

――今後やりたいことを教えて下さい。

「卒業生が地域で過ごす中で、孤独にならないよう、孤立しないように、卒業生同士のつながり、住んでいる地域でのつながりを強化していきたいですね。地域や卒業生同士がもっとつながって、例えば、何か困ったときに、卒業生同士がフォローしたり、地域の方と協力して対応ができることで、よりよい地域生活を送れるようになってほしいと思っています」

地域の餅つきに参加

――ありがとうございました。

年末年始、ホームレス支援団体の行事あれこれ（2020～21年）

かごしまホームレス生活者支えあう会より

毎年行っている年末年始の炊き出しは、コロナ禍の影響でギリギリまで協議を行い、感染対策を徹底することで開催することとしました。

会場を２００名収容可能な大ホールに変更した上で、路上生活の方とそうでない方で参加時刻をずらして告知し、密になる機会の削減を行いました。参加時には検温、体調チェック、アルコール消毒、連絡先の確認を行い、提供する食器も使いまわし防止の観点から全て使い捨てタイプのものにしました。普段炊き出しに来られている方は全員参加されましたが、既に住まいを確保されている方は例年の３分の１ほどの参加状況となりました。例年のような賑やかさはありませんでしたが、それでも越冬炊き出しでしか会えない方が何人も来られており、今後も感染対策を徹底した上で継続できるようにしたいと考えています。

長崎ホームレスを支援する会より

恒例の年末居宅訪問実施のため、１２月２６日（土）の午後、出島にある県民ボランティアセンターに１３名が集まり、支援している２０名分の贈り物パックを仕分けしました。切り餅、海苔、ぜんざい、みかん、ラーメンなどのほかに、長崎レデンプトリスチン修道院から頂いたクリスマスクッキーも添えることができました。しかし、今回は新型コロナウイルスを考慮し、居宅訪問は極力控え、郵送にて発送しました。何軒かは実際に居宅訪問をして直接差し上げ大変喜んで頂きました。この年末の居宅訪問は貴重な機会でもあり、当会の大事な活動として今後も継続されてゆくことでありましょう。後日、一部の方々からお礼の電話も頂きました。

美野島めぐみの家（福岡市）より

美野島めぐみの家の最終の食事提供は、コロナ禍のため例年と大きく異なり恒例のクリスマス会を行うことができませんでした。

食事の際は、３密にならないように、２０人ずつ交代制で対面を避けて座り、会話厳禁で、すき焼きどんぶりを黙々と食べました。お土産はクリスマスプレゼントとしてカイロ、靴下、手袋、マスク６枚、みかん、お菓子の詰め合わせなどをお渡ししました。

新年は１月５日に最初の炊き出しをしました。食事は新年らしい家庭で食べるような献立を考え、白飯、がめ煮、紅白なます、ソーセージのソテー、ホウレンソウなど葉物のアーモンド和え、ゆず大根、てんぷらの煮物、白玉団子を入れたぜんざいを提供しました。「家で食べるみたいだ」と皆さん好評で何杯もおかわりする人がいました。今年こそはコロナが収束して、また以前のように楽しく食事ができるようになりたいと切に願っております。

久留米越冬活動の会より

ＮＰＯホームレス支援久留米越冬活動の会では、２０２０年後半の活動としてパトロールと焚き出しを計画していました。

しかし、コロナウイルスの蔓延によって、密を防ぐことから炊き出しを食料配布に変え、小頭町公園での会食を避ける方向で進めました。

したがって、２０２０‐２１年にかけて行う恒例の突入炊き出し・新年餅つきは、開催できませんでした。

福岡おにぎりの会より

福岡おにぎりの会の年末最後の炊き出し夜回りは１２月２５日のクリスマスでした。サイズと名前を記入した袋に支援でいただいた下着や靴下、タオル、石鹸を入れて準備し、教会の可愛いクッキーや太宰府の最中等、たくさんのお土産を市内１０ヶ所で待っている方に届けることができました。

また、寒波襲来との情報に１２月２９日と１月５日に事務所の前で厚手の上着を中心に衣類を出して提供し、美野島めぐみの家の炊き出しに来られた方にも喜んでいただけました。１月８日は大型寒波の中、駆けつけたボランティアさんによって豚汁が出来上がり、凍る道路を心配しながら夜回りの準備を行いました。無理せず楽せずの活動が、コロナ禍の中でも続けられることを感謝いたします。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

ＮＰＯ抱樸より

新型コロナウイルス感染拡大への懸念が再び強まる中、恒例の新年炊き出しを１月３日、無事に行うことができました。勝山公園の会場には当事者のみなさん、ボランティア総勢１２０人が集合しました。路上で命を落とされた９９人の墓碑銘に参加者の代表が花束を捧げ、路上生活者を生まない社会の実現を改めて誓い、２０２１年のスタートを切りました。追悼集会では奥田理事長が追悼台を前に「この方々は命がけでひとりぼっちでいてはいけないと教えてくれた」とコロナ禍のもと一層つながることの大切さを語りかけました。

感染拡大防止のため委員会で議論の末、ボランティアによる弁当調理、会場での会食等を断念して当日を迎えました。それでも少しでも新年の華やぎを分かち合いたいとの委員会の要請に応えて「ゴーイングホームトリオ」のライブが続き、いつもより短いプログラムながら楽しいひとときとなりました。その後、通常の炊き出しを実施しました。抱樸館北九州の厨房で準備した焼き肉弁当に、温めた缶入り汁粉等を添えてお配りしました。コロナ禍でも「出会いの場」をみんなで守っていきたいとの思いを新たにした一日でもありました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

抱樸館福岡より

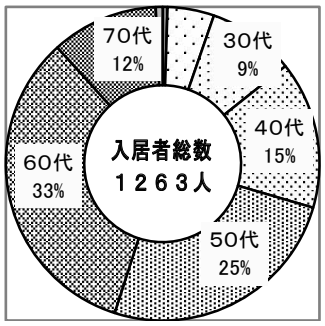
抱樸館福岡では入居者の皆さんに「少しでもお正月の気分を味わってほしい」という気持ちを込めて、大晦日に仕込んだブリを元旦の朝食でお雑煮と一緒に提供し大変好評でした。

三が日は入居者の皆さんで卓球を行うのが恒例行事でしたが、今年はコロナウイルスの影響で中止し、静かな年始を迎えました。

しかし、「書初めだけは欠かせない」と、密にならないよう間隔を空けて書初めを開催しました。「書初めなんて〇〇年ぶり」「うまく書けない」「準備された筆が悪い」など和気藹々な雰囲気で行いました。今年の意気込みを書いた作品、どういう意味なんだろうと思わせる作品など、多種多様な作品が出来上がりとても楽しい時間となりました。昨年はコロナウイルスの影響で皆で集まって作業をする機会が激減したことで、会話が減り、寂しい気持ちになることが多く、会話の大切さに改めて気づきました。

抱樸館福岡の入居・退居などの状況

開所から２０２０年１２月末までの入居者



	人数	割合
10代	6	0.5%
20代	63	5.0%
30代	111	8.8%
40代	192	15.2%
50代	316	25.0%
60代	420	33.3%
70代	146	11.6%
80代	9	0.7%
計	1263	100%

２０２０年１２月末現在の入居者

５４人（定員８１名）　男性５４名、女性０名

２０２０年１０～１２月の新入居者数・退居者数

新入居者数１９名　　退居者数１９名

（注：１２月末までの入居者数１２６３名は、
２度・３度入居した人も１名と数えています。）

抱樸館北九州の入退居の状況は、特集の際にご案内します。

抱 樸 館 を 支 え る 会 の 概 要

抱樸館を支える会の目的

以下の事業・活動を目的としています。

◇ホームレス者支援事業

◇抱樸館に関する広報活動及び資金援助活動

◇これらに附帯又は関連する事業

設立年月日：抱樸館福岡が２０１０年５月に開設されるのにあわせて同年４月１０日に設立

正会員：以下の１７団体が正会員です。

グリーンコープの各単協（１４生協）

グリーンコープ連合会

ＮＰＯ法人 抱樸（旧：北九州ホームレス支援機構）

社会福祉法人グリーンコープ

賛助会員

２０２０年１２月末の賛助会員は、以下の通り

グリーンコープの共同購入組合員　　１０，１７２名

グリーンコープの店舗組合員・一般の方　　１７９名

企業賛助会員　　１０２社

その他（抱樸館の所在地）

抱樸館福岡（福岡市東区）　　２０１０年　５月開所

抱樸館北九州（北九州市八幡東区）２０１３年　９月開所

抱樸館下関：新たに開設を準備中

抱樸館熊本（熊本市中央区）　　２０１８年１２月開所

抱樸館福岡の見学のご案内（現在、中止中）

・抱樸館福岡を身近に感じていただき、ホームレス問題を深く知っていただくために、広く見学を募ってきました。多くの方が見学に訪れてくださり感謝申し上げます。

・大変残念なことですが、現在コロナ禍のため、入居者の健康を最優先し、見学を中止しています。

・状況が変わりましたら、会報やホームページ等でご案内を再開させていただく予定です。ご了承下さい。

抱樸館を支える会　賛助会員と会費について

抱樸館を支える会　賛助会員募集

賛助会員を募集しています。

賛助会員には、会報をお届けします。

グリーンコープの共同購入組合員

賛助会員の申込には２つの方法があります。

①毎月２５０円の賛助会費を申し込みいただく（年間で３０００円です）

毎月の商品代金と一緒に引き落としとなります。

共同購入申込書の**１３００**で申し込みください。

②１口１０００円の賛助会費を申し込みいただく

何口でも申し込み出来ます。

申し込みいただいた月の商品代金と一緒に一括して引き落としとなります。

共同購入申込書の**１２９９**で申し込みください。

賛助会員は一度申し込みいただくと毎年更新されますので新たに申し込みいただく必要はありません。（グリーンコープの共同購入組合員の場合）

①の賛助会員は毎月継続して２５０円請求させていただきます。②の会員は申し込みいただいた月に毎年一括して請求させていただきます。

一般の方、グリーンコープの店舗組合員

１口１０００円の賛助会費を何口でも申し込み出来ます。

郵便振替でお願いします。

郵便振替　01710-0-123003

一般社団法人　抱樸館を支える会

企業賛助会員　募集中です

企業賛助会員は、会費が１口１０，０００円です。出来れば３口（３０，０００円）以上でお願いします。申し込みは、下記へ。

「抱樸館を支える会」事務局
〒812-0011
福岡市博多区博多駅前１丁目５番１号
社会福祉法人グリーンコープ内
電話 092-482-1964

抱樸館の連絡先

抱樸館福岡　（電話 092-624-7771　FAX 092-624-7772）
〒813-0034　福岡市東区多の津５丁目５－８

抱樸館北九州（電話 093-883-7708　FAX 093-883-7705）
〒805-0027　北九州市八幡東区東鉄町７－１１

抱樸館熊本（電話 096-245-7521　FAX 096-245-7522）
〒860-0811　熊本市中央区本荘